

氏 名	はやし だ あい 林 田 愛
学位の種類	博士（文 学）
学位記番号	文 博 第 309 号
学位授与の日付	平成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	文学研究科文献文化学専攻
学位論文題目	ゾラにおける進歩の概念 伝統的科学主義からの離脱

論文調査委員	(主 査) 教授 吉 田 城	教授 田 口 紀 子	助教授 増 田 眞
--------	-------------------	------------	-----------

論 文 内 容 の 要 旨

本論が目指すのは、作家エミール・ゾラ（1840-1902）の作品を19世紀後半、とくに1860年代後半から1890年代までのフランスにおいて、思想史、科学史と関連づけて正確に位置測定をおこなうことである。ゾラはいわゆる自然主義文学運動の中心的な作家とみなされ、プロスペル・リュカやヴァイスマンらによる当時最新の遺伝理論をもとに20篇の小説から成る『ルーゴン＝マッカール叢書』（1871-1893、以下『叢書』と略記する）をほぼ一年に一作のペースで執筆した。ルーゴン家とマッカール家の数世代に及ぶ変転の歴史を、近代市民社会が成立したフランスの時代背景に絡ませて壮大なスケールで描いたものである。

従来ゾラについては、楽観的な進歩主義者として文学史のなかに位置づけられる傾向があった。けれどもゾラにはこうした一義的解釈ではとらえきれない部分が多に多い。それどころか、精密に時系列に従ってその作品群を追っていくと、彼が科学技術や近代産業社会の発展を称揚しながらも、そこにさまざまなひずみを認め、人間と社会に対する根本的な問いかけをしていることが明らかになる。ゾラは文学的創造を通じて、近代の思想と科学に対してある種の異議申し立てをおこなっていたのではないか。

19世紀末のフランス社会は＜科学主義＞から＜科学の破産＞への推移に象徴される大きな知的・精神的地殻変動を経験した。ゾラは生理学・医学・心理学に強い関心を示し、自然主義作家として科学知の進歩を肯定的に評価をしながらも、自分の生きる世界が孕むさまざまな危機に対して警告を発している。本論文は、ゾラがいかにして＜進歩＞に不可欠とされる＜道徳＞という概念を宗教と科学に通底するものとして描いたのか考究したものである。ゾラは『パスカル博士』（1893）の草稿準備メモに「生、それが神だ」と書き込んでいる。この言葉は、既存の宗教を超えた「生の信仰」を示唆したものと考えられる。

本論第一部は「ゾラと近代医学」と題され、ゾラとクロード・ベルナールの根本的な科学観の相違を分析している。第一章では、『生きる歓び』（1884）の草稿準備メモに残された「生体解剖反対」という言葉を手がかりとして、ゾラが『実験小説論』（1880）の着想を得たベルナールの『実験医学序説』（1865：以下『序説』と記す）が孕む倫理的問題、とりわけ動物実験の蔓延を論じている。哲学者フィリップ・ミュレによれば19世紀は歴史上、病に対して人々の関心が最も高まった時代である。だが急激な科学技術発展が過度の「科学信仰」を招来したことは否定できない。「医学の発展」のかけには動物実験を含む生命の犠牲をいとわない風潮が生まれがちである。ベルナールは『序説』のなかで＜道徳＞という概念を人間の特権と認め、動物はそのための犠牲、科学のための「道具」とであると公言する。

このような発想は科学者だけではなく、一般社会にも受け入れられてきた、科学信仰社会の病弊であるとも言える。もっとも、人間の道徳の進歩を信じたヴィクトル・ユゴーやヴィクトリア女王、ラスキンなどのように、動物の生体解剖を非難した人々もいた。エミール・ゾラもまた、行き過ぎた科学主義を憂い、健康な理性に支えられた「よき科学」を求めている。

第二章は、ゾラ作品に登場する「医師」像を通して、生命の畏敬という問題を取り上げている。『叢書』を締めくくる

『パスカル博士』の同名の主人公には、ゾラ自身の思想的成長が凝縮して表出している。ゾラはもともと「ベルナルのモノグラフ」を描こうとしたが、執筆の過程で「その破片」しか見いだせなくなったと自ら認めていた。この小説には、ルナンの科学思想の影響も認められるが、それより重要なのは、ゾラ自身が人生上の様々な経験をする事で到達した独自の生命観である。パスカル博士は長い人間中心の歴史のなかで虐げられてきた動物の擁護をうたいつつ、種の違いを超えた「生命の畏敬」の必要性を説く。それはヴォルテールやミシュレなど思想家が動物へ向けた慈愛と軌を一にしている。パスカル博士も『生きる歓び』のカズノーヴも、医師として患者に対してもつべき「同苦」の感情を動物に対しても広げたのである。

医師が患者に対してもつべきこの慈愛こそ、ギリシア医学が伝える「術（アルス）としての医学」が包摂するものであった。論者はベルナルが『序説』において、この「術としての医学」を軽侮し、最高の科学知である実験医学が自然現象まで支配しようと考えていたことを説明する。しかし、ゾラが『実験小説論』において実際に力点を置いたのは、「術としての医学」であった。その理想は、患者の体を傷つけぬことに細心の注意を払いつつ、自然治癒力を高めることにある。それは19世紀に見直された「自然療法」が受け継いだ原理であった。機械論的価値観に基づく近代医学に対し、古代医学と多く共通点を併せもつ自然療法の根底には、近代医学を刷新しようという進取の精神があった。それゆえ19世紀末のフランスでは近代医学と自然療法が互いを批判し自己主張をおこなう興味深い局面が生じたのである。ゾラの作品は、医学史の一般的記述ではすくいきれない「科学の危機」を浮かび上がらせている。

第二部で論者は、ゾラと自然療法の関係を考察する。当時の医学理論に照らしながら作家がどのように「健康」を定義したかを跡づける試みである。第一章は、医学史家が「治療のニヒリズム」と名づける現象が、ゾラの描く医師像に反映していることを検証する。ゾラは『叢書』執筆開始前後からすでに、キネジセラピーやホメオパシーなどの自然医療に興味を示している。前者は物質文明に病む近代人の健康法として、後者は反近代医学的治療法として認識されたのであった。『序説』に出会う1879年初頭から1880年10月の母親の死までの期間は、ゾラが科学礼賛にもっとも傾いた時期であるが、小説『生きる歓び』は科学主義社会に対する疑念と自己反省をこめた作品である。

通常この小説に関しては、ゾラが神経症の青年ラザールに代表される表層的なペシミズムを弾劾していると解釈されてきた。しかし論者は、批判の本質は個人の思想ではなく、科学主義社会全体を浸食する病弊にあると考える。ゾラは草稿準備メモのなかで、ラザールが「歩み始めた科学」の病人である、と書いており、これが本論の仮説を裏付ける。科学時代におけるペシミズムの蔓延は、科学信仰の限界と無関係ではない。「治療のニヒリズム」すなわち有効な治療法に対する信念喪失の現象は一種の世紀末病である。

近代医学への期待が大きく揺らいだとき、多くの人々がそれに相反する自然療法に救いを求めたのは当然の帰結であった。どれほど科学が発展しても、治癒行為にはつねに未知・不可知の部分がつきまとう。この神秘に挑んだのがパスカル博士である。この医師が試行錯誤の末にたどりついたのが、自然治癒力への確信である。ゾラはパスカル博士が考案する治療法のモデルとして近代医学の文献のほかに、錬金術を医学に応用したパラケルススと共通する治療法を提示している。

第一部と第二部において、ゾラにおける「反近代医学的」な科学観について検証したことを受け、第三部では、ゾラの科学・宗教観をめぐる思想表出のトポスとしての「菜園のある庭」というテーマにしばって検討している。ゾラは科学に求められる謙虚さ、静謐さという概念を、何人かの医師に託して提示した。この医師たちにとって、健康な理性に支えられた科学こそが理想である。ゾラは伝統的な科学のドグマを批判したが、それは彼の宗教観にも通じている。『叢書』から『三都市』シリーズ（『ルルド』（1894）、『ローマ』（1896）、『パリ』（1898））へと執筆を進める過程で、カトリック教会への批判はそれぞれのかたちで展開される。ゾラの考えによれば、科学も宗教も道徳を等閑視してドグマティズムに陥ると、精神を墮落させる存在となる。

第一章ではまず、『プラッサンの征服』（1874）に描かれた「ムーレの庭」と「マッカールの庭」の分析を中心として、「庭」という空間が、権力を象徴する「病の創造の場」としての教会と精神病院の両者に対立する場となることを詳細に分析した。また、『制作』（1886）における「クロードの庭」の分析では、作家が「科学の破産」ゆえの精神的荒廃を弾劾する様子が説明される。ゾラが「原罪」と呼ぶ「遺伝」の影響が、世俗的楽園である庭の秩序を脅かす「悪」として機能していることが分かる。

ゾラが批判の矛先を向けたキリスト教や文明社会は「禁断のりんご」という役割を担っている。遺伝がいわば原罪となり、

樂園喪失すなわち社会の頹廢につながる。ゾラが描く「菜園」は、たしかに閉ざされた、例外的な場所にすぎない。けれども、そこにはイデオロギー的なメッセージがこめられている。自分の土地を地道に耕し、野菜を育てることは、壮大な社会改革でもなければ権力への挑戦でもなく、ましてや完全な隠遁生活でもない。現実を認識し、実生活に根ざした創造の喜びを味わう行為なのである。野菜を育成する庭はあくまでも静的な存在でありながら、現実社会の矛盾や混乱を明るみに出す象徴的な場所なのである。

第二章ではそのような庭の住人を分析する。菜園の主は「良き神父」もしくは「賢者」であり、彼らが「病む訪問者」に発するメッセージはそのままゾラによる社会批判に通じている。近代科学の急激な発展と、それがもたらす誤解と矛盾を同時にみた当時の青年たちが受けた精神的衝撃は深刻なものであった。ゾラがラザールの神経症を「事実だけしか信じない実証主義者の病」と規定したように、ある人間が科学的思考による自然の征服を信じたとき、いったん挫折を体験すると、精神の危機に瀕したり、超自然的なものへ逃避したりする。社会が極端な物質主義、実証主義を押し進めたとき、脆弱な精神はこうした陥穽に落ちやすい。

ゾラの批判は、とくに知的発信源としてのエコール・ノルマルに向けられている。社会の知的エリートを自認する青年たちのなかには、「科学主義はエレガントでない」として、不消化のベシミズムやスピリチュアリズムに没入する者がいたが、それはゾラの目には社会的な病の「徴候」として映った。歴史家たちは、社会思想としての科学主義は1883—1884年に終焉を迎え、それ以降、教会が再び勢力を盛り返したという。多くのノルマリアン学生はこの動向に著しく影響を受け、キリスト教回帰を行なったのである。

病む登場人物の対極に、健康で静謐な一群の登場人物がいる。それはフランソワ夫人やジャンベルナ、オルトゥールやマリーであり、彼らはみな耕す庭を所有し、与えられた生を十全に生きるすべを知っている。論者は、これら「静かな無神論者」と「庭」との関係にみられるひとつの仮説を提示する。ゾラにとって、心身を癒し解放する庭仕事は、形而上的探究から一歩退いて、地上での一瞬一秒を尊ぶ機会を与えるものであったという仮説である。

ゾラは『学生への訓示』（1893）で、既成秩序の変質と崩壊を前にして、机上の空論で知的渴望を満たそうとする若者にむかってこう問いを投げた。「科学は幸福を約束したのだろうか。私はそうは思わない。科学は真実を約束したのであり、真実が人を幸福にするか否かということが問題なのだ」と。科学が死後の樂園を否定したことによって、どれほど多くの人々が絶望したか。また科学の無力さがさらに大きな精神的混乱を招いたか。ゾラにとって科学が啓示する真実を受け止めるには、確かな「自己否定」と「ストイシズム」が必要であった。それこそゾラの考える謙虚な科学観の根幹を成すものであり、科学の未来に欠かすことのできない行為であった。

この二つの要素が、本論で論じてきたゾラの描く「賢者」の人格を形成するものにほかならない。彼らの健康な理性こそが、科学への節度ある信頼をかたちづけている。ゾラは「働く人々だけが強く、労働のみが勇気と信仰を与える」と考えた。科学万能主義、単純な進歩思想がかつての幻影として滅びゆく時代に、この言葉は生きるよりどころを示唆するものと考えられる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、フランスの自然主義文学を代表する小説家エミール・ゾラ（1840-1902）を、とくに科学思想の視座から同時代の文化的文脈に正確に位置づけようとしたものである。ゾラはクロード・ベルナールやプロスペル・リュカの科学理論、遺伝理論を参照しながら『実験小説論』（1880）を著し、その影響下に20編の小説から成る『ルーゴン＝マッカーール叢書』（1871—1893、以下『叢書』と略す）を執筆したとされている。この作品群はルーゴン家とマッカーール家の数世代に及ぶ変転の運命を、近代市民社会が成立したフランスの時代背景に絡ませて壮大なスケールで描いたものであり、文学史的にはバルザックの『人間喜劇』の衣鉢を継ぐものと評価されている。

論者は、従来自明の理とされていたゾラの科学主義・進歩思想に疑念をもち、まったく異なった解釈を提出した。それははたして作家は本当に当時の科学思想を文学に応用しただけなのか、という根本的な問題提起である。第一部「ゾラと近代科学」においては、ゾラが『実験小説論』の着想を得たとされるベルナールの『実験医学序説』（1865）を精読することによって、ベルナールの方法論が内包する動物蔑視の思想に光を当てる。論者によれば、ベルナールが科学の進歩の旗印の下

に動物実験や生体解剖を美化し推奨していた事実に対し、ゾラはほどなく異論を唱え、動物虐待の行為を批判していたのである。

その典型的な例が『叢書』最終巻の『パスカル博士』である。ゾラは当初ベルナールの方法をこの小説のなかで展開しようとしていたが、実際に完成した主人公パスカル博士の姿はそれとは異なり、「生命の畏敬」を重んじる医師、動物に愛を注ぐ人物となった。ゾラは、近代科学にいまだに解決不能な部分が多いことを認識し、科学万能主義の破綻を前にして、科学信仰を拒否したりそこから逃避したりせず、古代の自然療法へと接近していったという。従来のゾラ解釈に大きな変更を迫る論者の仮説は、19世紀の医学文献や草稿資料の博搜に裏付けられており、説得力に富んだものである。また、獣医学の歴史と宗教の関係を論じた節、ルナンの科学主義とゾラの距離を考察した節は異色の文学研究として評価できる。

第二部はとくにゾラが自然療法やホメオパシーに対してもった深い関心について考察している。この作家が瀉血・下剤・外科手術といった伝統的な「英雄医学」を批判し、また一方で効果の不確かな新薬の使用に疑念をもち、むしろ自然治癒力を高める「術としての医学」を重視していたことが、具体的に検証される。このような視点は、従来ゾラ研究ではほとんど検討されることのなかったものであり、論者の独創的な取り組みを示している。近代医学を超える新しい医学は、ゾラの考えるところでは、遠くヒポクラテスの医学思想やパラケルススの錬金術的発想に淵源をもち、また一方では民間医療や薬草蒐集などから影響を受けている。『生きる歓び』に登場するカズノーヴはそうした新しいタイプの医師であり、懐疑主義者の青年ラザールと対立する存在である。

論者は医師像の解析から一步進んで、この小説の女主人公ポーリーヌこそ隠れた理想的な医師であると指摘する。自らの遺伝的問題点を強い精神力によって克服し、病人を癒し、周囲に希望を与えるポーリーヌこそ、本能的に自然治癒力を備え、他者にもそれを奮い立たせるゾラの理想的治癒者をあらわしている、とする鋭い指摘は十分に首肯できるものである。

以上の考察にもとづいた第三部において、論者はとくにゾラ作品における「菜園」の存在に注目して分析している。ここはとくにその独創的な着眼がよく示されている部分である。小説『プラッサンの征服』（1874）では共和主義者ムーレのもつ庭が重要な役割を果たしている。その庭園は正統王党派ラストイユの庭とボナパルト主義者副知事の庭にはさまれて、空間的にも政治的確執の要となっている。しかもそこにはゾラの反教権主義と、隔離的精神病院制度への批判という二重の重要主題が隠されているという。論者はこの仮説を補強するためにゾラの草稿資料を調査し、準備段階におけるマッカールの庭という興味深いもう一つの空間の存在を明らかにしている。

さらに論者は、ゾラの積極的な社会改善のための解決策ないし展望を提示している。それは、『制作』（1886）における「クロードの庭」、『三都市』叢書の『パリ』（1898）に描かれるローズ神父の庭のように、雑踏と喧噪を離れて自分の土地を耕し、野菜を育てる庭の存在である。こうした菜園の所有者は、情熱的な社会改革者でもなく、ましてや隠遁生活者でもない。それは良識をもち、実生活に根ざした創造の喜びを味わう人々なのである。本論が最終的に賢人として示す菜園の主は、温厚で謙虚な一群の人物であり、彼らは極端なイデオロギーや科学信仰を嫌い、健全な理性と現実認識をそなえた治癒者である。

本論文のすぐれた点は以下の三点にまとめることができる。第一に、ゾラに関し『叢書』のみならず、後期作品群、評論、書簡など広い文献資料を視野に収め、当時の医学文書などを幅広くフランスの図書館で調査していること。第二に、ゾラの自筆原稿を部分的にはあるが実地に調査し、未発表の一次資料から重要な論点を得ていること。第三に、この主題が従来のゾラ研究の枠組みを大きく超えた独創的発想にもとづいていること。これらにより、本論文は最近国内外で非常に活発となっているゾラ研究に大きな貢献をおこなったと言える。

もちろん、物足りない部分がないわけではない。論者が扱う「科学」と「宗教」の問題が、本来の中心主題である「医と癒し」の問題にうまく連結されておらず、時として単純化された議論に帰している。また海外滞在が長かった論者が、しばしば適正な日本語表現を駆使できず、論旨の飛躍や反復を招いていることも事実である。けれども、これらは今後さらに研究を深める過程で克服されていくと思われ、本論のもたらした知見を損なうものとは言えない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2005年2月4日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。